

## 第 11 回高等学校改革プラン推進委員会（第二推進委員会）議事録

1 日時 平成 17 年 11 月 13 日（日）午後 2 時 30 分～午後 5 時 30 分

2 場所 上田情報ライブラリー 5 階 5 階会議室

3 出席委員

飯島 俊勝委員長	宮阪 義彦委員
佐藤 元太郎副委員長	滝澤 清登委員
遠山 順孝委員	中沢 裕委員
小林 将喜委員	西村 廣一委員
太田 節委員	市川 久由委員
和泉 碩也委員	原 貞次郎委員
荻原 拓次委員	

4 開会

（植松主任教育支援主事）

本日は、お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。

それでは時間となりましたので、委員長、よろしくお願いいたします。

（飯島委員長）

今日は芹澤委員が欠席でございます。

まず初めに前回 1 通の第一推進委員会に合わせましてというよりも、第二推進委員会で  
もわれわれの検討事項に対しての参考資料あるいは対案を出していただくために、県のホ  
ームページにその募集の旨を掲載したわけです。それについて、5 つの資料が出てきてい  
るようであります。

皆さんのお手元に配布されておりますし、傍聴の皆さんにもお配りしてあると思いま  
すが、それについて事務局から説明をお願いします。

5 資料説明

（植松主任教育支援主事）

それでは、よろしくお願いいたします。

まず 10 月の末から 11 月上旬にかけて、県外高校視察、それから県内松本筑摩高校、  
塩尻志学館高校の視察につきまして、ご多忙の中お参加をいただきまして、本当にありが  
とうございました。

それでは資料の説明の前に他地区の推進委員会の状況につきまして、簡単に触れさせて  
いただきたいと思います。

前回、こちらのほうの会議 10 月 28 日以降の状況でございますが、10 月 30 日の日曜日  
に中信地区第四推進委員会で第 10 回の会議を開いております。こちらで第 10 区の個別論  
議を行ったということでございます。生徒数の減少や、これまでの議論してきた学校規模  
等を考えると、将来的に 3 校以上は無理ではないかということを再確認したということで  
ございます。

それから引き続きまして、本日午前中でございますが、中信地区第四推進委員会のほうでは、第11回の会議を行っております。こちらのほうでは、引き続き第10区につきましてご審議をいただいて、木曽山林高校と木曽高校を統合する方向で考えていくということを確認されたということでございます。

続きまして第一推進委員会の状況でございますが、第一推進委員会は昨日11月12日土曜日に、第11回の会議を開いております。推進委員会の検討の参考とするために、地域の団体等から再編整備に関する具体的な提案を募集しまして、14団体からの応募があったということでございます。昨日、会見発表をいただいたということでございます。またそれに対しまして、委員の皆さまから質疑が行われて意見交換がなされたという状況でございます。

以上簡単でございますが、他の推進委員会の状況についてお話しさせていただきました。

（原 委員）

議事進行に関して、ちょっとよろしいでしょうか。

（飯島委員長）

はい、どうぞ。

（原 委員）

先が見えないものですから、ちょっと伺いたいのですが、議事進行についてです。これから事務局のほうで、地域からの提案というのをご説明があるということですか。

（植松主任教育支援主事）

ご報告をさせていただくということでございます。前回の折に、望月高等学校存続と発展を図る実行委員会のほうから提案をいただきまして、それにつきましてご報告をさせていただきましたので、それと同じようにその後募集期間中に応募のあった要件につきましても、ここでご報告をさせていただきまして、審議の参考ということでお願いしたいというふうに考えております。

（原 委員）

議事進行についてお願いしたいと思うのですが、前は今お話しのとおり、望月に関する対案が出されて、それひとつですからね、説明がありましたが、前回の委員会の話し合いの中で、さらにいろいろな意見を伺うということになって意見が出されてきているということは知っております。

そうすれば、時間も取ってそれなりの提案団体から説明を受け、そして必要な質疑を行うということのほうがよろしいのではないかと思いますがいかがでしょうか。

(飯島委員長)

取りあえず事務局のほうから説明をいただきまして、そうしますと今日ほかの委員さんは、この場所でいただいたわけですから、説明を聞いた時点で大方の内容がわかりますからより詳しい説明が必要なのかどうか、その点のご判断をいただいて、その必要があれば提案者から説明をいただこう、そんなふうに思います。

ですからまず、事務局のほうから説明をお願いします。よろしくどうぞ。

植松主任教育支援主事から資料説明 【説明内容省略】

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

前回の委員会のときに、望月高校からひとつ出ておりました。前回の委員会のときに、この後波状的に対案のような委員会に対する提案が出てきた場合困るから、期限を切って募集をしようということで、今、説明のようにお手元の資料でいきますと2番から5番まで出てきたわけであります。

都合、望月高校のものを含みますと、5つの提案が出てきております。これについてひとつずつ説明を、提案者からいただいたらどうかという原委員からの提案がありましたが委員の皆さん、いかがでしょうか。内容を見た関係、状況の中で、その必要があるのかどうか、ご意見をいただきたいと思います。

私が今説明を受けた段階でありますと、望月高校の件につきましては、ご自身のところが多部制・単位制にという立候補によるものでありますし、それから野沢南高校から出てきている件に対しましては、やはりご自身のところが多部制・単位制対象校として、県のたたき台に載っている関係から、多部制・単位制は交通の至便のよい都市部に設置したらどうかとか、それからご自身のところが多部制・単位制に、万が一移行された場合には現状の240名の子どもたちはどうするのかということ。

それから魅力ある学校づくりについては、シンポジウム等やったらどうかという提案であります。それから、野沢南高校教職員組合分会らのものに関しましては、先ほどP7の一番下にありましたように、現状として他の学校へという対案ではありませんが、本校の存在もじゅうぶん認識しながら討議を進めてほしいということであります。

それから4番目のものは、この上小支部と佐久支部の教職員組合から出たものであります。これにつきましては、拝見しますと私たちが今まで議論してきたものを、もう一度再掲載して、現状で何とかお願いしたいというように見て取れますが、その辺のところを感じるわけです。

それから最後の5番目の、長野五輪記念学校設立準備室、ちょっと私はこれについてはじゅうぶん対案の意味が見て取れない状況であります。委員の皆さんはどうお感じになりましたか。

そんなことから、前回の委員会でも太田委員からだと思いますが、この第2通で多部制・単位制をまず導入するのかどうなのか、どうしたらいいのか。県から私たちの委員会に所掌事項で示された多部制・単位制を、この2通に設置したらいいのかどうか、まずそれを私たちはせっかく前回静岡それから群馬と行ってきた委員さん方も多いわけですから、そ

れを踏まえてこの２通ではそういう多部制・単位制を設けるほうがいいのか、どうなのか。そのご意見をいただき、議論を深めて、設けるならばどこへという、今度この代替案を含めて議論を進めていきたい。と、思うわけですがいかがでしょうか。

（西村委員）

委員長がまさしくおっしゃったように、また前回太田委員も言っておりましたが、まずわれわれが多部制・単位制についてどう思うかということ、議論してから、それぞれの個別の案件についてやっていくことが、一番わかりやすいやりかたではないかと思います。今の委員長の発言に賛成です。

（原 委員）

結論から言うと、どちらでもいいのですが、この委員会として多部制をどうとらえるかということ、議論するのはいいですが、同時にこの短期間にもかかわらずいろいろなご意見が寄せられていますから、それについて正当な時間を保証してお話を聞く機会をぜひ持っていたきたいということでもあります。

（飯島委員長）

これは委員会の中で、必要と認めた場合は、対案といたらいいんでしょうか、ご意見に対してはそのような場所を取るという形にしていきたいと思いますが、そんなことで進めたいと思います。

それでは多部制・単位制を、この２通に設けるか、設けないかという議論に入りたいと思います。これにつきましては、過日群馬、静岡に実際に視察に行っております。その先生方の感想も含めながら、お考えをいただければ、一番よろしいかなと思いますので、お願いしたいと思います。

静岡は市川委員だけでしたが、群馬のほうは多くの委員さんが行っていただいておりますので、あえて指名はいたしません、行った委員さん方ご発言をお願いしたいと思います。

（荻原委員）

先日行きましたが、多部制・単位制につきましては、大変私はお金と物と、そういうものがかかる、それが整備されないと機能し得ないような格好ではないかと思います。視察した両校とも相当な設備投資をしているわけですね。コンピューターシステムから、踊りというか、演劇ができる空間まで、相当なお金と物と情報とか、そういうものを蓄積しないと難しいのではないかと考えております。

またそこへ入る生徒さんが、中学での不登校の経験者、それから高校の中途退学あるいは進路変更の皆さんがほとんどであるというようなご説明でしたけれども、やはりそうしたセーフティネットが必要ですが、県がそれなりのきちんとした設備投資や、人材投資せず中途半端な格好でここで進めていくと、元には戻らなくなってしまうのではないかと思いますので、私は例えば１校を多部制・単位制にするのではなく、便利のいいところで（全日制との）併設でもちゃんとした設備と、そういったお金をかけてやれば、交通至便など

ことでやればいいのかと思います。

無理に1校転換するのではなく、その辺の準備期間においては1校転換するのはいいですが、そういったセーフティネットが必要であることはわかっていますので、取りあえず交通至便な高校に併設する形でやっていったらどうかということを強く感じたわけです。

また総合学科につきましては、新田暁高校と塩尻志学館を見せていただきましたけれど、これも非常に予算、設備、その他に充実させないと、総合学科としての機能はなかなか難しいのではないかと考えております。

ただ丸子に関しましても、その設備はもっと検討してもらって、こういった格好でやるのか、その体制はやはりじゅうぶん必要じゃないかと思います。前回、特に旧6の佐久地方では、総合学科、手を挙げたら速やかに次のときはやっていただくということで、佐久ではやはり吸引力、いろいろな面で考えますと資産という問題もございますので、例えば臼田高校という格好で候補を挙げても私はいいのではとっております。

それからもうひとつ、地域高がございますが、そういう中で中学校もクラス数も減ってきていると。高校も減ってきている場合には、中高連携、高校間の連携ではなくて中高連携で、例えば体育館とか先生とか、設備については共用できるような学校で考えても、それは新しい学校をつくるわけですけど、そういった格好で実際に秋田の由利本庄市ですか、そこでそういった学校で実際に動いているようなお話を聞きました。そういうのもひとつの方法ではないかということで、ご提案申し上げる次第でございます。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございます。

多部制・単位制のほかに、総合学科のほうに関するコメントと、また新たな中高連携の学校もどうだろうというご提案をいただきました。

ほかに視察した方、いかがですか。

（中沢委員）

太田フレックス高校ですね。多部制・単位制ということで、直接視察できて、大変参考になりました。必要性ですよ。そういう点においては、セーフティネット的な考えでは、確かに今の時代の中では必要かなと思います。

太田フレックス高校の生徒の中でも、約半分ぐらいが中学時代に不登校傾向の生徒であったということでした。中には3年間で400日以上欠席だった生徒が、今はほとんど欠席もなく来ているとか、あるいは外国籍の生徒が結構入ったり、あるいはほかの高校から転学をしてくるという、そういった生徒で構成されているというようなこと。

そんな点では、生来のセーフティネット的な要素が強いということを感じました。それから11月4日に実際に視察に行ったのですが、次の週の月曜日にたまたまテレビのニュースの中でそれを取り上げることがありましたので、私もちょっと録画しておいてあとで見ましたが、その中で直接生徒にインタビューしていたんですね。

私どもが行ったときは、直接生徒とは話し合うということではできませんでした。授業の姿を見たり、そこの校長先生とかに説明を聞いたんですが、生徒のインタビューの中で私が印象に残ったのは、一人日本舞踊をやっている生徒が、ステージにも立っているくらい

のレベルの生徒が自分が日本舞踊をやりながら、しかも高校生活ができるという点においては、大変この学校はありがたいということをいったことが印象に残りました。

そういった多様性に答えられるという点においても、この多部制・単位制は機能が大であると、いうことを思いました。それからもうひとつ、これは当日校長先生が言った言葉で、「もしこの学校がなかったならば、社会問題がもっと大きくなるんじゃないか」と。それはなぜかという、今言われているニート、あるいはひきこもり、そういった子どもたちがもっと多くなっていってしまう。という話を聞きました。

そういう点においては、この学校は機能を果たしているというようなことを答えていた、そんな点において、それなりに大事な役なんだということは思いました。ただこの第2通学区に置いた場合に、太田市の高校と比べた場合に太田市は合併してかなり大きな都市になってきたのですが、はたしてそれだけの子どもたちが集まる、そういう要素があるのかどうかという点においては、かなり不安といえますか、未知数だということが私自身思っています。

しかし、その趣旨はよく理解できたということが感想です。以上です。

（佐藤副委員長）

私も太田へ行きまして、2校視察してまいりました。先ほどの委員と、ほとんど同じ感想ですが、ひとつ私が安心したのは総合学科に関しては私が当初主張しました、このような制度では基礎学力が落ちるんじゃないかという心配がありましたが、私が心配したような学力低下、専門性の低下を落とさない学校で、カリキュラムが組まれておりましたので安心しました。

これというのは、1年目に『産業社会と人間』という授業を設けまして、これでしっかり将来設計を立てるような過程が組まれています。そういう中で2年目からこの暁高校では系列別に分けまして、2年目からかなり自分の選んだ系列に沿って授業を進めていくということで、ある系列に入ってしまったら、2年目以降「やっぱりこれに合っていないから」ということでほかの系列に移れるのかという質問をしたら、それはかなり難しいというお話でした。

そういう中で、私は1年目にかなりガイダンス的な授業をやって、2年目からはしっかり専門科目というか、自分の選んだ系列について学べるなというようなことで、私が考えていたよりも、かなりしっかり教育をしていけるカリキュラムじゃないかなと思いました。

そういう意味で、先ほどもお話がございましたように、この2通では丸子に一応決定したわけですね。そういう中で、これからどういうカリキュラムでやるかというのは今後の問題。これはしっかりカリキュラムを作ってやっていただきたいと思います。

それから太田フレックス高校ですが、これは多部制・単位制の高校です。これは開校1年目で、この4月に開校したという中で、正直申しましてこれからかなり課題が多いなという気がいたしました。

やはり、本来この多部制・単位制高校というのは、自我が確立していない子どもと云ってしまえばまずいのですが、自分の方向性が定まらない学生を対象にしているとすると、ほとんど自分の責任においてカリキュラムを組んで単位を取っていくと、こういう制度が果たして合っているか心配です。

こういう中でどのように、どこでその生徒にきめ細かい指導がなされるのかなということがありまして、先ほどのセーフティネットの話がありますが、確かにこういう生徒が多いわけですので、必要性はじゅうぶん私も認めてきたわけですが、かなり工夫をしてこれを導入するということではないかなと思います。

「長野県版」じゃないけれども、見てきた制度そのものではなく、どういうふうにして長野県に合った、ほんとにいろいろ問題を抱えた子どもにもあった、そういう制度を作るかということが、ほんとに大切なことであって、導入する必要性はある程度感じてきたわけですが、「どこへどのように導入して、どのようなシステムを構築していったらいいか」ということに関しては、かなり課題が多いのではないかなと、こんなふうに感じていたわけでした。

以上です。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

移行して1年目の学校としての問題点も含めまして、いただきました。ほかに参加いただいた委員さんいかがですか。

(小林委員)

今の佐藤委員さんの続きになりますが、私もフレックス高校に行く前は、自己責任、自分の希望で単位を取るというシステムは大変だなと思っておりました。学年制以上に大変だし、単位が取りづらくなるんじゃないか、そういうお話もございましたが、全部生徒に任せるのではなくて、ある程度の規制があるという話をお聞きして、ありがたいなと思いました。

例えば3部制ですが、1部、2部、3部あるうちの、1部は卒業するまでに半分以上の単位を、1部で取らなければいけない。1部に入学して、2部、3部の単位を相当多く取っても、だめ、ということを入學時に子どもに持たせるという、そんな感じになると思いました。

太田フレックスはクラスはないわけですが、一応ゼミという形で一人の先生が約10人受け持つようになっており、その中で子どもたちと先生とのかかわり合いというものも大事にしているということで、今年の4月に開校したばかりですので、今後そういうものもどういうふうにしたらいいかということは、検討していかなければいけないということでありました。

自己責任といっても何らかのバックアップあるいは子どもを見詰めていくという、そういうものはなければいけないんじゃないかなということを勉強してきました。

(市川委員)

お願いします。

私が一番多部制・単位制に期待することは、生徒の側から見て、私も現場で指導しながら考えていることですが、個に対する支援の充実がなされるのではないかなという部分。そういう大きな改革になるのではないかなという期待を持っております。

単位制によって、一人一人が何をどのように取っていくかを、じゅうぶんに支援する体制が出来上がっている。従って訪問させていただいたどの高校でも、先生方が一生懸命説明されて自信を持っていらっしゃる。そういうご説明の内容あるいは表情の様子あるいは態度、学校の体制を見ても、どの高校につきましても、自身とこれからの期待をじゅうぶんに感じさせていただいております。

特に塩尻志学館では、職業科の専門教育については自信を持って、きちんとつけられると。これは保証するというふうにおっしゃっておいりました。総合学科になっても、単位制の総合学科になっても、本来まったく問題ないと繰り返しおっしゃっていらっしやっている。丸子実業にも、2 度もお出掛けになって説明をされているお話ですし、ここへも実際には来ていただいているわけですが。

従来の学年、学級制から、ほんとに高次元レベルにかかわって、一人一人をどのように育てるかという大きなきっかけになるものが、この単位制の中にあるのではないかなというふうに期待を持っております。

特に中学の立場で申しますと、この職業科に卒業させていくわけですが、受験させていくわけですけれども、期末テスト、その他の成績によって自分で合わせていく。しかしながら本当に実際の「機械科になぜ行くのか」、「なぜ応用生物に行くのか」、「なぜインテリア科に行くのか」ということは、じゅうぶんに考えさせた上で行かなければならなかったわけですが、それがほとんどなされないまま来た経過もある、そういう生徒も多いわけです。

前期試験によりまして、前期、後期と2回、高校の学力検査が設けられる結果になりまして、その点につきましては面接重視の前期に合わせて先生も生徒もじゅうぶんに考えられるようになりました。

従って出口では、ずいぶん改善されるようになってきました。しかし入り口ではどうでしょうか。高校側の入り口では先ほどお話がありましたように、太田フレックスさんに見られますように『産業と社会』という単位を取りまして、ここでじゅうぶんに練った上での、つまりこれはガイダンスなんです、塩尻志学館でもじゅうぶんにガイダンスを練って、なぜここに入ったのか、何をどう取っていくかという、個人の支援をじゅうぶんにされている。

この点が、従来と違った点ではないかなと思います。その職業科に入れば、40 人なり、定員に満たなければ 30 人で、もうその単位が決まっているわけです。どこをどういうふうにするかということは決まっているわけです。どのように、そしてこれがどういう結果になるかについては、卒業してみないとわからないというところもありまして、だんだん 3 年間、徐々に子どもたちが勉強する。

しかし高校の入り口と出口をじゅうぶんにその点を考えられるということに、単位制の利点があるかなというふうに思っております。また、こうした内容は個人に対するじゅうぶんな支援ということにつきましては、ほかの機会に見られることもあろうかなと思いますけれども、このように大規模に学校を挙げてキャリア教育にもかかわると思いますけれども、充実した支援が行われるのは、やはり単位制ならではのものではないかなと、私は期待しております。

( 太田委員 )

今は多部制についてでしょうか。

( 飯島委員長 )

はい、多部制・単位制についてのことを伺っています。

( 太田委員 )

いいんですね。総合学科、単位制についてはあえてもういいんですね。

( 飯島委員長 )

総合学科については、一応委員会では決まっておりますから、あとただ付帯決議のところで、こんなのつけたらいいのだろうということは、意見をいただければ。

( 太田委員 )

総合学科・単位制の導入については、先回付帯決議されていますが、新田暁高校を見学させていただき、皆様のご意見とは違った見方をしておりますので、最初にこの問題に触れさせていただきます。

まず、先生方は専門性を維持されるために、大変ご努力されていることがわかりました。専門学科数は工業高校の場合よりカリキュラムの段階から絶対数が少ないとのことですから、この点からすでに工業高校よりハンデをもつことになっています。また、先生がおっしゃるには、「おかゆ」になってしまうのを避けるために、生徒に履修指導を重点的におこなっているとのこと。「おかゆ」というのは、いわゆる専門性が薄まるという意味で使われていました。総合学科・単位制には、この問題がどうしても付きまとうことになることが良くわかりました。

先生方はある程度強制的に、専門科目を取らせるような指導をおこなっていましたが、総合学科・単位制はそもそも、履修科目の選択性の自由度が特徴であり、魅力であるはずです。しかし、実際の現場では半ば強制的に専門学科の履修を迫っているわけであります。

ですから、事務局は総合学科・単位制についての説明では、良い話ばかりをするのではなく、デメリットになる可能性についても提示していかなくは、判断を誤る人も出てきたりして、後で後悔することにもなるのではないのでしょうか。

先の委員会で丸子実業高校を対象候補として確認をしましたが、その後いろいろな方から問い合わせ等をいただいています。一番の問題は、ほとんどの方が総合学科・単位制について正しく理解していないということです。そこで私は総合学科・単位制とは、パイキングレストラン方式です、と説明をしているところです。「誰でも、何でも」が基本コンセプトです。

事務局としてはこの方式の導入については約束事ですので、どうしても実行しなくてはならないという立場にあることは理解できますが、説明責任は果たしていただきたいと思っています。一般の皆さんは、何かこの方式を導入すれば前途洋々の明るい展望が開けると言うような、何でもかなえられる「打ち出の小槌」のようなモノとして受け止めているように見えます。

それとともに全国的に先行している事例では、実業高校が総合学科・単位制を導入した件数は、わずか数パーセントであるという事実も、公表していくべきであります。

今後は、教育投資（税金）を、どこに、どのように重点配分をすべきかを、十分考えて行なっていく必要があると思っています。このことが、魅力ある高校づくりにも直接的に影響すると思うからです。税金の無駄使いは、住民訴訟というような法的範疇でも指弾されることにもなりますので、適切な判断をしていかななくてはならないと考えます。

再投資する場合は、私であれば、バイキングレストランには、一流のフランス料理のシェフは配置しません。お隣のフランス料理専門店の方に優先して配属させます。バイキングレストランには、優秀なテーブルマスター（お客の好みを見きわめて、料理の選択をアドバイスできる）を優先すべきでしょう。

本題の多部制・単位制の件に戻りますが、私はこれも説明をわかりやすくするために、「コンビニエンスタワー方式」と言うことにしています。この方式の学校は「誰でも、どこでも、何時でも」が基本コンセプトで、コンビニと多くの共通性があります。坂城ご出身のイトーヨーカ堂（今は名称が違いますが）社長鈴木さんが30年前ですか、アメリカでセブンイレブン方式の小売ビジネスをご覧になり、日本で導入したいという提案をしたところ猛反対にあったという話は皆さんよくご存知かと思います。当時としては通念を破った、画期的な発想であったという、新たな経営……。

（飯島委員長）

太田委員、もう少し簡潔にお願いします。

（太田委員）

の方策であったわけですね。こういう発想を私は評価しておりますし、同様に、従来にない発想に立つ多部制・単位制の学校づくりを提案されたことも評価しています。新たな挑戦的課題として取り組んで頂きたいし、私も委員会メンバーとして、導入の後押しをしたいと思います。

しかしながら、この学校が成功するかどうかのカギ、絶対条件はコンビニエンスストアがそうであるように、設置場所の利便性であります。この点は十分な論議をしていただきたいと思います。

（飯島委員長）

内容について、いろいろご説明をいただきながら、太田委員さんとしては、ひとつぐらいいは入れてもいいという、内容案は大いに検討していく必要は当然あるんでしょうけれど、ひとつ入れていったらどうかというような形でご発言いただいていると思います。

（太田委員）

挑戦してみると。

（飯島委員長）

はい、挑戦してみると。

(和泉委員)

私は、県外の見学はできなかったのですが、最後の日に松本筑摩と、それから志学館を見て、総合学科についても、私の意見としてもう出していることなので2つ、3つ付け加えたいと思うんですが、1つはやっぱり県外の見学された方の意見を聞いても、そこに新しくできた先生たちがすごいエネルギーと目標を持ってやれている、これがそういう意味で、今、多部制・単位制というのをやっても、イメージがなかなかできていないので、これをどうつくり上げるかという、これが基本的にはそこに携わっている先生たちがすごいエネルギーを持っているし、もちろんそれに生徒、地域も一緒になってやっていると思います。

このエネルギーがなければ、こういうシステムをつくっても、やっぱり伸びないのではないかなと思います。そういう面では、前回もどこかでかけましたが、ほんとに先生たちご苦労さまだなと、給料上げたいなと、こういう気はしました。

その中で、総合学科については、やっぱりこれは松本も両方なんですけど、スペースに拡張性がないところは、非常にあくせくしていると。だからコアタイムをつくるためには、広い会場がほしいと。それも部分的に、いくつかわけてやらなければいけないと。そういう配慮、設備投資については運営側の意見もじゅうぶん聞いてやった形が、実現可能な今、検討されている学校があれば、そういう拡張性、運用性について対応できるかどうかのチェックは絶対入れておかないといけないと思います。

狭いところでやっていたってしょうがないと。そういう面で、松本筑摩を見たときに、周りに何にもなくて多部制をやって、ただ3部制をやるときの期間、現地に行ってみてわかったことは、要するに朝、昼、夜、そういう意味でセキュリティ、その辺のところをちゃんと保障してやらないと、例えば自転車でくる人、歩いてくる人、勤めから車でくる人、それが時間帯がフリーですから、いろいろな身分の方が今でも小学校なんか、学校を規制して、異常な人が入らないようにということをしていますけど、そういう面については、もうちょっと配慮が必要じゃないかなと思います。

そういうことが多部制のところであったときは、いろいろ考えてあげなければいけないんじゃないか。そういう面で総合学科については、両方かもしれませんが先生たちのエネルギーというか、それとコア時間の対応と、設備投資、それから松本筑摩については、やっぱり寮があって、寮がなくなったという話だったんですが、やっぱり交通の便がよかったですね。

高速バスを利用して下伊那のからも来ますけれども、寮には入っていません。寮はもう機能を果たさなくなってやめましたということであると、どうしても利便性。そういう意味合いでは、今、ここに資料をいただいているんですが、現実を踏まえた意見書ではあるんですが、将来生徒が減ったときを想定したときの視点からいくと、ちょっとまだ私から見ると全部を読ませていただいていませんけれども、対応ができないんじゃないかなと思います。

そういう意味合いでは、太田委員が前回行ったとき、どこか駅前にもう一回ダイナミックな、将来の減に対する、将来の高校減、私は今回限りじゃないと宣言していますから、それに対して、ある程度組み込みをできるように拡張性のあるところを。例えば交通の利便性がいいところにつくったほうが、結果的に今回の検討は既存のものをイメージしてやっているんですが、どこかで脱却することをやらないと、「いくつもつくれ」ということで

はないですが、そういうことも検討の思案に入れて、将来生徒数が減したときに、どこかで青絵をつくらなければだめじゃないのかなと思います。

そうしないと、野沢南高のところを自分で行ってみますが、拡張性だとかいろいろなことを考えると、今のイメージでどこまで言っているのか。将来を危惧したときどうするのかということについては、やっぱりいろいろな意見が出るんじゃないかと思います。

そういう意味で、今回勉強させもらった2カ所を見て、これからの自分の意見の中では、それを含めて討議に参加させていただきたいということです。

以上です。

(遠山委員)

私は、群馬県のほうへ行かせていただいて、ちょっと表現が下手でうまく言えませんが、総合学科の新田暁高校を見せていただき、その後多部制・単位制のフレックス高校を見せていただきましたが、新田暁高校は、発足して10年だということで、ぼつぼつ中だるみというか、発足したときから見ると、少しいろいろな面で足踏みを感じるというような話がありました。施設の中を見せていただきましたが、さして新しいものを感じなかったですね。

工業機械や介護実習用のストレッチャーなどが置いてありましたが、学校で言えばあの程度かなと感じました。高校で危険物の主任者免許を取れたりといった、いろいろな資格が取れることが魅力じゃないかと思います。

しかしほんとに社会に出てやっていくには、もっと専門性のあるものにしていかなければいけないんじゃないかなという感じはしてきました。

それから、太田フレックス高校。これは本年4月からの発足でしたね。だからまだ結果が全然わからない。すばらしく金がかけてありました。まだ始まったばかりだから、前身の高校がまだ残っていたようですね。

その中でひとつ、太田市というのは外国人が多いですね。そして積極的に工業発展をしているところですね。だから特区というのを国に申請して、中学から日本語を話さないで英語を勉強しろということで、本気でやっているところなんですね。

この中で、太田市と新田町も含めて3市町村が一緒になって21万7,000都市に確かなったと思います。その中でこれを運営しているわけですね。そして中身を見ますと、良いところも悪いところもあるなと思いました。学校としては落ちこぼれのないように何とかやっっていこうという、そういう姿勢が見えたりする。

だけどものすごく金がかかるぞ、先生もたくさんいなくちゃいけないし、それから先生が人気があれば、ああいう学校というのは務まらないなと、そんなことをちょっと感じました。

それと太田市を見たときに、山なんか遠くにかすんで見えるくらいで、ほとんど平らなところなんですね。そして学校は東武線の木崎駅という駅から10分程度の位置にあり、非常に便利のいいところなんですね。午前中やる者と、午後やる者と、それから夜やる者もいたかな。それぞればらばらでやっているわけだけれど、はたして長野県でどこがいいかと考えさせられました。

当県のように山坂が多いところで、鉄道なんか本当に一部分的通っている。長野県での

対象地域はわずかになるわけです。範囲とか選ぶと小さくなってくるからどういうものか？いわば鳴り物入りで始めたがこれからが未知数かなと思います。

教育の内容について、私は素人だからいろいろ申し上げる立場ではありませんが、そんなことを感じたわけです。

（市川委員）

よろしいでしょうか。

先ほど申し上げましたように、個に対する支援の充実として、単位制という考え方、これは塩尻志学館の、もう決まったことですが、丸子実業が総合学科へと。これにつきましても、前回は前回も申し上げているように、現行のものを設備、人材、資源。資源と申しますか、現有のインフラを活用して総合学科にしての単位制ということは容易であって、これは割とうまくいくかなと思います。

しかしながら、私も静岡中央を見させていただいて、非常に大きな違いを感じているのが、そういったインフラの問題です。個に対応するには、それなりの器がないといけないかなと。既成の学校を、今度は普通科の転換です。普通科の単位制として、しかもその定時制の多部制ということを入れていきますと、非常に個人を重視するような環境も同時に必要になってくる。

しかも人材を先ほど遠山委員がおっしゃられたように、人材も集めなければならない。こういったほんとの支援面で、財政的、人的な支援が充実するという付帯条件がじゅうぶんにあった上でないと、これは発足するのは大変かなと思います。

実際に、理念としてはこれは進めてありがたいと思うんですが、実際やるということになったとき、現行の普通科の高校を持っていくことによって、本当に魅力ができるのか。静岡中央ですと、この間太田フレックスを見ていただいて、じゅうぶんに予算を使われたお話がありましたが、静岡中央はもっとですので、これはもうフレックス以上ですので、これはシステム的な問題ではなくて、じゅうぶんにその予算が設けられていると思います。

この点が非常に私も大事な点かなと思っておりますので、付け加えさせていただきます。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

教育は人だということは、もう当たり前のことでありますけれども、また委員の皆さまからそれが出てきております。

（原 委員）

ちょっと質問があります。

私も視察に行く予定だったのですが、あいにく体調を崩して行けませんが、申し訳なく思っています。

そこで一、二質問をお願いしたいと思いますが、まず端的に言って学級に代わる「ゼミ」というお話がありましたが、それは具体的に、日々毎日どのような形で運用をされているのかということでもあります。

それから２点目は、例えば生徒会であるとか、あるいはクラブ活動ですね。特にフレッ

クス、多部制なる場合は、同じ時間帯を生徒諸君が共有してクラブ活動を展開することが、どう考えても難しくなりますね。それをどのようにやっているのかという、取りあえずその2点を教えていただきたいわけです。

というのは、少し意見も加えたいんですが、私がいまさら言うまでもなく、高校生はいろいろな形の学校に通いながら、教科における学習と、教科外の特別活動を続けながら成長をしていくわけですね。単位制の学校の場合には、そうした教科外の特別活動、こういったものがどうしても難点として、いわばシステムの欠損として指摘せざるを得ないと思うんですね。

ですからさまざまことを、どこの学校でも、静岡でも太田でも工夫をされていると思うんです。そこを教えていただきたいと思います。

それから、いまひとつ申し上げておきたいのは、実はもう単位制という考え方について、今までの議論でも私は2、3回発言したことがあります、どうも正確に使われていない。

教育委員会の資料自体が、実はそここのところが大変あいまいになっていると私は思っています。と言いますのは、「現在の高校は学年制で運営されている」と、簡単に教育委員会の資料にあるわけですね。

今度は新たに単位制だというわけですね。これはおかしい議論でして、現に例えば高校で、私は社会科の教員ですが、世界史を2年生で4単位学習するとか、数学を5単位学習するとか、そして卒業要件として74単位以上というように、まさにれっきとした単位制なんですよ。

そしてその単位制と学年制を併用しているんですね。現在の学校のシステムはそうなんです。今言われるところの総合学科であるとか多部制については、これは正確な言い方をすると「単位制のみで運営する」ということですね。

ですからそこには学年という考え方であるとか、学級という考え方が入ってくる余地がないんですね。そここのところを正確にしながら、最初に申し上げました2つの点について教えてください。

（中沢委員）

実は私も太田フレックスに行ったときに、今のような疑問を持って行きました。それで質問をしました。1つには、まず生徒会「これはどのようにやっていますか」と聞いたら、1部、2部、3部、通信制、それぞれで生徒会組織をつくって運営していると、こういう答えでした。

それから「クラブ活動はどうなんですか」。そしたら、ちょっと私も理解できない部分もあったんですが、バスケット、バレー部、卓球部があり、現段階では太田西女子高校と併設という段階ですが、その体育館を使ってやっていると。そういう回答がありましたね。

それで実は私は後で、うちへ帰ってきてからほかの他府県の多部制・単位制高校をインターネットでちょっと見たのですが、結構そういった生徒会とかクラブ活動を組織していますね。どんなように運営しているか、細かいことはわかりません。なるほど、何か工夫すればできるのかなと、そういうことをまず思いました。

それからホームルームの関係ですが、これも非常に気になったのですが、ゼミ制をもってやっているということでした。ゼミは、それぞれの先生方が一人ずつゼミに入るんです

が、「生徒がゼミを選択する」と。そこがすごく現在の高校の学年制と違うところかもしれません。

普通は学級編成はすべて決められて、生徒側からは先生を選択する余地というのがないわけです。ところがこのゼミ制は、生徒のほうから「私は、あのゼミへ入ろう」、「こちらのゼミへ入ろう」と選択する。だから言ってみれば、極端なことを言えば、馬が合わなかったら、年度途中で変えるかわかりませんが変更が可能だと、こういうことでしたね。

その辺では、逆に先生たちの力が必要かなと。それで、いつそのゼミをやるかという、太田フレックスの例ですと1週に1時間、1時間というと90分単位で1時間ですが、決められていて、そこでロングホームルームとゼミを行いながら、その生徒と担任の先生とがコミュニケーションを取っていると、こういうような説明でしたね。

ほかの方、まだあったらお願いしたいと思います。

(原 委員)

ーこま90分はわかりましたが、毎日はどうなんですか。

(中沢委員)

毎日はないんですね。

(市川委員)

付け加えて、そのゼミのあり方につきましては、先生の個人の魅力だけではなくて、先生が教えていらっしゃる内容。何か情報を持っていられる先生、英語をどういうふうに見えるか、社会なら社会をどのように教えるかというシラバスを、生徒のほうに配りまして、その先生の人柄とそのゼミの内容と自分の単位を合わせて取っていくといったものだと理解しています。

将来の、学級担任に代わるものとしましては、ゼミの担当者と進路指導者で、それらとやっていくというお話で、これを10人前後というような中でやっていくと。少ないところは、5人でやっていこうと。

しかし単位制につきましては、私は太田フレックスでも質問させていただいた。全日制は、静岡中央も太田フレックスも同じですが、太田フレックスのほうを説明させていただいた単位制、私が担任をしていたときには、やっぱり学年制でどうしてもこれだけの力ではほんとに単位を修得させていいのかどうか。出席は、ぎりぎりクリアしている。しかし中身が、どうしてもそれに値しない。

そういう場合には加味して、学年制の場合には無理に、たったひとつのためにということがありまして、次の年次に送るようなことを配慮してやることもあり得るわけですが、太田フレックスは一つ一つ単位ごとですので、何年かかって履修しようと構わないわけですから、社会へ送り出す強さ、これを育てるには、やはり単位をしっかりと取らせると。それらの話を、校長先生のほうでされていました。単位、一つ一つについて中身を吟味し、社会に送り出すと、そのような話をされていたということを付け加えさせていただきます。

(中沢委員)

今の市川委員の意見にちょっと付け加えというか、思ったことなんですが、私の印象や、また説明の中で残ったことは、多部制・単位制の場合には生徒自らのコントロールする力が一番必要だろうと。「自分自身をコントロールする」。

ということは、さっきの「バイキング方式」じゃないですが、好きなものだけ食べているわけにいかないんですよね。やっぱり、必要なものを必要な範囲を取っていく。そして時間だって、これは自分の都合に合わせて組み立てるのですね。

始業時間というのは、普通の全日だったら例えば8時半とか決まっていますよ。それが無いわけですから、まさに自分で時間をコントロールして、この時間には行かなければいけない。そういうつもりでいる。そしてこの単位を取らないと、卒業できないということですから、まさに自らコントロールをしようとするということは、確かだと思います。

逆に難しい面だと思います。それからもうひとつは、単位認定ということは、「入りやすいが出にくい学校」なんですね。これも説明されましたね。自分で、まず出席しなければどうにもならない。出席日数が足らなければ、もう自動的に単位は取れない。そしてまたそれなりの試験なり、レポートなりを出していけないと単位はくれない。そういう厳しさがある。

それがまさに、多部制・単位制の難しくもあり、メリットでもあるのかなという気がします。そして最大8年、太田フレックスでは、最大8年の中でそれを修得する。そういう制限があるということで、ほんとに生徒自らが歩んでいかないといけない学校なんだなということ、つくづく感じました。

以上です。

(佐藤副委員長)

私も、多部制・単位制に関して非常に悩んでいることは、多部制・単位制というのは本来自我が確立した人間にとってはいい結果が出るだろうと、私は思います。

これが例えば進学対応型の単位制高校、これだったら自分の進路をしっかり見定めているわけですから、その進路に合わせて早く自分の基礎的な科目を身に付け、なおかつ進学対応の授業を充実させると、こういう意味で多部制・単位制というのは、個が充実した、確立した学生にとっては有利であると思います。

ところが、私はこの多部制・単位制に関しては、どちらかと言えば個が確立していない、進路が定まらない。あるいは自分の将来に関して、まだ非常に疑問があるというような生徒を対象にして、この多部制・単位制を導入していった場合に、先ほども言いましたようにガイダンスはしっかりしますよと言いますが、やはり単位・学年制、のほうがはるかに生徒に対する生活指導等に関しては、充実しているんじゃないでしょうか。

私が太田フレックスに行って感じたことは、私どもは大学へ行ってまず何をみますかという、大学へ行ったときにはまず掲示板をみますよね。掲示板を見て、「この先生の授業は休講だ」「おれは授業料納めていないから、呼び出しをくっている」と。そういうような中で、フレックス高校へ行った場合に、まずそれを個人が見るわけですよ。そして自分が、どこで何をしたらいいかということ自分で決めて行くと。

こういうシステムの中で、くどいようですが、個が確立していれば、それで自分の目的

がじゅうぶん達せられるんじゃないかと思うんですね。ところがどちらかと言えば、これから先生の手を煩わせて、それで一人前の学生になっていく段階で、これを導入した場合にどうなのかと。そういうことで私は非常に先ほどのセーフティネットの話もありまして、こういうシステムは必要だなと思いつつも、実はこれを導入した場合に、これをどういうふうにこれを運営していけるのだろうかということが気になります。必要ならば8年間かけてといいます、そういう個が確立していない人は、恐らく最後まで行かないのがほとんどでスピンアウトしてしまいますよ。

私は、ここまでいろいろ議論してきた中で、この多部制・単位制というのは確かに必要な制度であるということは、恐らく皆さんも共通の認識がある程度あるんじゃないかなと思います。

その中で、多部制・単位制導入は、今までどうも暗いイメージの中での制度と考えられていましたが、もっとこの制度を導入して進学対応型のような、魅力のある学校にする。そういうような中でこれを考えていくように、まず発想を転換していかなければ、なかなか難しいのではないかなと思います。恐らく具体的に挙がっている野沢南高校の関係者たちも、恐らくこの制度を導入することによって、他の進学校よりも優れた生徒の教育ができるんだというシステムを運用の仕方ではできますよとなれば導入してもよろしいと、なるのではないかなと思います。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

今までご報告をずっと頂いている間にも、私も感じておりました。それぞれの委員さん方が、やはり責任感を持って、「ここがこうなったらどうなんだろう、困るじゃないか」という、「困るほう」をだいぶ見てきていただいて、組織をつくるときに、あるいは施設をつくるときに、「こういうふうにしてほしい」、「それを運営する先生方は、こうやってほしい。そうすればうまくいくよ」というような、前向きな形でこれをとらえていくという意見が大事であります。ご心配の意見をたくさん頂いていて、それは当然大事なことでありますけれども、私たちのところで、総合学科は「GOサイン」を取りあえず出したわけです。先ほど太田委員から出していただきましたが、これについては、心配事が現実にならないように運営をしていただきたいということで、県教委をお願いしていくことだろうと思います。

多部制・単位制につきましても、私も残念ながら出席できなかったのですが、お聞きしていると「ああ、大学のミニ版だな」という感じで聞いておりました。そうすると、そのところでそれぞれ委員さん方は、高校へ入ってくる子どもたちが、「自ら方向を見だし実践する力がなく大丈夫かな」とご心配の向きはあるようですが、私は今の子どもたちはもっと力強いような気もするんです。

環境をつくって、教師たちが引っ張ってくれば、必ず力を発揮してくれる子どもたちばかりだと思うんですね。ですからそういうシステムをつくってあげるということでは、今話を聞いておりますとこれをつくっていく価値のある制度かなというふうに、私は聞いていました。

それは、どこへつくるかということは別問題として、ひとつ導入に向けて前向きに踏み

出したらどうかと感じたんですがいかがでしょうか。

（太田委員）

委員長のおっしゃることに賛成です。多部制・単位制高校は学校経営という観点からみると、新たなビジネスモデルの導入と言うことになりますね。これには新たなシステム、ソフト、ハードを取り入れていかななくては成り立たないと思います。

太田フレックス高校の入校、退校管理は情報システム化されており、女性1名で管理されていました。新たなビジネスモデルを構築して、魅力ある学校づくりに向けて、工夫し、知恵を出し合い研究検討されることが大事なことだと考えます。コンビニエンスストアにあれだけのお客様が集まり、お客の心をとらえているのは、ソフト、ノウハウの積み上げがあるからだ、私は日頃感じているところです。鈴木社長のところに教えを請いに行ってもいいくらいではないですか。

教育委員会さんも、従来の学校づくりとは一線を引いて、腰を据えて取り掛かる必要があると思います。是非このところに重点的にご努力されるようお願いします。

（西村委員）

私は、実際に他県の学校を見に行く機会がなかったので、先ほどから皆様のご意見をずっと伺いしておりましたが、これはまさしく新しい学校をつくるひとつのきっかけだと思います。

先ほども太田委員のほうから多部制・単位制はコンビニエンス形式とおっしゃいましたが、それも一理あります。でももうひとつは、私は前からずっと言っていますが、生徒にどうやったら勉強したい、どういった職業に就きたいか、そういったモチベーションをどうやって与えられるのか。

これはわれわれの、教師に限らず大人の役目なんです。その一つが総合学科であり、一つが多部制・単位制だと私は思っております。まさしくセーフティネットも必要ですが、おもしろい学校がくれるんですよ。午前中、1部でやって、午後は「受験に特化した学校にしようじゃないか」とか、例えばサッカーを強くしたいから、「午前中授業をやって、午後サッカー部で集めようじゃないか」とか、いろいろな展開が前向きにできる、学校づくりもできる。

だから任された先生はきついかもしれないですが、おもしろい展開ができる一つの例なんですよね。ぜひ、前向きな議論をしましょう。先ほど委員長もおっしゃいましたけれど、そういった形で取り組む一つの方法として、私は多部制・単位制は取り入れるべきだと思います。また場所を、どこに設置するかということは別問題でいろいろな議論があると思いますが。

（小林委員）

私も、方向とすれば賛成ですが、まだいろいろわからない点や、懸念する点があります。

教育課程の問題についてですが、一応多部制・単位制、普通科と銘を打ってやと思いますが、先日松本筑摩へ視察に行きましたときに、家庭科、商業科、それからあと情報、外国語がありました。筑摩高校は最初全日制も含めながらの、定時制ということで出た

と思います。この家庭科、商業科、科にはなっていないと思いますが、それが履修できるということはどういうことなのか。

商業科とあるのは、その施設設備、先生方もおられますが、多部制・単位制、普通科の高校をそれに当てるといふふうになったときに、要望がかなえてもらえるのかどうか。例えば、情報や国際、商業、家庭というような、一人一人のニーズ、それを満足して満たしていくとなれば、それなりの先生の加配も必要ではないかと思います。

職業科ではありませんから、そういう加配があるのか。あるいは特別にそういうものをつくるのかということです。

それから先ほどの資料の中にもございましたが、今の校舎、今の設備じゃだめだと言う。私も大方の皆さんのように、まったく新しい学校をつくるというような意味で、それを導入していただきたいなと思います。今のままの校舎ではなくて、新しい校舎をつくるような、そういう意気込みでやっていかなければいけないと思います。

それからフレックス高校では、「こういう講座をしたい、こういう学校にしたい」と、全県的にその先生を公募して、そこに新しい学校で自分も子どもと一緒にやってみたいという先生を、そこへ配置転換をやりましたが、長野県としてもそういうふうにしていただきたいけれど、そんな方向ができるのかどうか。

ここで最後の報告書に、そういうものを書き入れたときに、どの程度の願いがかなってくるのか、それをかなえてほしいなということなんです。普通科ということで、「普通科」だということになるのかどうか、そこに付帯決議として幅広く、いろいろな面としてやっていただけるような余地があるのかどうなのか。

ということです。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

総合学科、多部制・単位制、これを導入するにしても、それだけの意欲と投資と人員配置をしてもらえるのか。現時点で、お答えできる範囲で、事務局、お願いします。

（柳澤教育主幹）

まず最初に、学科の件でございますが、前に推進委員会のほうにお示ししました資料で、長野県で考えている多部制・単位制のイメージということで、お示した資料がございます。その中では確かに普通科ということで入っておりました。現在イメージしているのは普通科でということでございますが、いろいろなご意見の中で、また新たな学科というようなことも可能性としてはあろうかと思っております。

今、ご質問がありました普通科の中に職業科の科目選択ができるかと、こういうお話だったと思いますが、現在も全日制課程の普通科の中でも、さまざまな普通科の科目だけではなくて、職業科目も履修できるような学校が多くなっております。

今、お話のありました家庭科や、あるいは商業科、情報、そういった関係の科目は選択科目として用意されているという学校がいくつもございます。普通科の中にあっても、選択科目として職業系の科目を選択することは十分可能ということでございます。

それから教員の加配の問題でございますが、現在の標準法でまいるまでも、いわゆる

同じ規模の普通科単独校に比べますと、若干人数が多く配置できるというような制度になっております。

なお、教員の公募のお話でしたが、これは担当のほうから回答させていただきます。

（篠原教育幹）

お願いします。教員の公募ですが、実はあるひとつの限定をつけまして、長野県教育委員会高校教育課では、昨年度から教員の公募を実施しております。これから課題のある学校、課題を持って新しくしていかなければいけない学校、これがこの改革プランの関係で、当然出てくることになります。

そうした中で、やはり意欲のある先生方、そこで新しい学校をつくりたいと、こういう先生方についての公募、これも検討していかなければいけない、そういう課題だと思っております。

なおこれも検討の課題と考えておりますが、例えば学校長、教頭といったものも、新しいところで新しい学校をつくりたいという意欲に燃えた、そういった人材。これが確保できるような、そんな形もやはりこれからの検討課題だと認識しております。

（飯島委員長）

もうひとつ、事務局で加配の件が今ありましたけれど、篠原先生、加配のことをお願いします。

（篠原教育幹）

具体的な加配でございますが、これは当然今、柳澤のほうから申し上げましたとおり、新しい課題を持つと。それから新しい、例えば多部制・単位制であるというところでは、通常の普通科、いわゆる全日の普通科というものに比べて加配があります。

それからこれもまだ、これからいろいろな方面との間で考えていかなければいけないわけですが、やはりこれも県財政ということも絡みますけれど、事情が許せばこれから改革プランの中で、いろいろな面で時間を使っていかなければいけない学校については、何らかの形でそこにじゅうぶんな時間が割けるような、そういった教員配置というものも、私どもとしては求められれば考えていかなければいけない。そのようなことであろうというふうに思っております。

（飯島委員長）

はい、ありがとうございました。

（太田委員）

お聞きしたいのですが、過日、今回の改革案を実施すれば 23 億円の経費削減になるとの説明がありましたが、これは再投資にまわせるのですか？その意志、方針はあるのですか？

(柳澤教育主幹)

23 億というお話が今ございましたが、当然新しい学校システムをつくっていく場合に、投資すべき部分というのは出てくると考えております。ただ、推進委員会のほうでどういう報告をいただけるか、またそれに基づいての実施計画というのがまだできていない段階でございますので、個別具体的な「こういう点に、こういうものを投資」というところまではお示ししておりませんが、当然のことながら必要な経費につきましては要求してまいりたいと思っております。

例えば今の多部制・単位制につきましても、生徒、在籍管理といったようなことのシステムの導入とか、あるいは施設、設備の点でも、その学校にどういう中身をつくっていくかによっても異なっていくと思いますが、必要なものは考えてまいりたいと思っております。

(太田委員)

教育投資には優先順位を高くしておこなうことが必要でありますので、他は削っても、この23億円は使い切っても良いという覚悟で、再投資に振り向けていただきたいと思います。

それからもう一点ですが、次年度も教育改革は継続検討され、継続実行されると思いますので、特に、実業高校をどうしていくのか、実業教育の専門性を高めるためにどうするかをテーマとして論議をするようお願いします。

私が思うには、まず、長野県の実業高校、実業教育をどうするのか、どうあるべきかを明確にしていくことが、最初にあるべきではなかったかと考えています。これが前提にあって、実業高校が総合学科・単位制を導入する是非を論じなくては、本末転倒になってしまうのではないかと考えています。このままの動きで行ってしまったら、長野県の実業教育はますます競争力のない「商品」になる可能性があります。

それから、世の中の動きに遅れないように、むしろ先取りしていけるように専門性に磨きをかけていくために、各地区に「実業教育専門センター」的学校を設置したらどうかと思います。ここに専門性をもった先生方を集合して、実習教育等の研鑽システムの中で再教育するとか、民間経験者を採用するとかにより、今までの通念を破った発想で専門教育の拠点化をはかれるのではないかと考えます。ここから、例えば総合学科・単位制高校の実業学科に、先生を出前してもいいのではないのでしょうか。実業高校が総合学科・単位制に転換しても、従来の実業科の先生方をこのように活用すれば、専門性も向上し、モラルの低下に歯止めがかけられるとも思います。

また、派遣業者に委託をして、今後大量定年退職をする団塊の世代の民間経験者等に登録していただき、専門教育分野の一部を分担していただくとかをすれば、社会に直結した、先端的な技術動向、方向等も学習できるのではないかと考えます。このような柔軟な人材活用の仕組みも導入検討いただきたいのです。

(飯島委員長)

答えが必要ですか。

( 太田委員 )

何かありましたらお答えいただきたいです。

( 飯島委員長 )

では、お答えできる範囲で事務局お願いします。

( 篠原教育幹 )

今、ほんとに新しい発想で人材派遣センターをつくり、そこからというのが。そういう形では現在長野県では行っておりませんが、例えば大学の教授であるとか、あるいは地域のその道の専門家であるとか、そういった方々を積極的に活用する、そういう仕組みはもうすでにできて、活用されているというのが現状です。

( 小林委員 )

先ほどの続きになりますが、投資という言葉も先程出てきましたが、今検討しています適正な配置転換でありますけれども、当該校だけではなくて、影響を受ける周辺校ということも、今後大事にしてもらいたいと思います。

( 和泉委員 )

先ほど 23 億の話が出たのですが、気になっているのは、長野県の財政が苦しいって、要するにそういうところは調整になってしまうということが、やっぱりどこかで歯止めをかけておかないと、例えば志学館に行ったときも、設立されてからパソコンを使っているのですが、われわれから見るともうだんだん陳腐化していったって、卒業されたときにわれわれ企業が受け入れるときに、古いものに習われていたものに、やっぱり追従できない。

そういう面で、例えば設備についてとか、こういうものについては、何年たったら置き換えるとか、そうすると必ず予算の芽はつくれるのですね。それについての財源は絶対取るんだということをやらないと、結局財布が苦しくなると。

私はやっぱり、そういう教育というのはよくないと思うんです。調整にされてしまうのは。だから必要なところは、ピシッとルールを決めて、それにかかったものは再投資する。それが結局われわれの今回の意見ではできないのですが、教育の仕組みの中でやっぱりこれだけはもう学校をつくって、そういう目標をつくって魅力ある高校をやると決めたんだったら、その財源のそれがこれを積み上げていったら、13 億になったら 13 億の財源は高校教育のために取る。

そういうような強い意志と決定をしないと、ここで理屈をつくってもインフラが整わなかったら危ないと思うんですよ。だからそういう面での意見としては言うておきますが、付帯協議にするかどうかは別問題ですが、皆さんが回られてみて、この総合学科はいろいろなことを見ても設備のインフラというのは定期的にメンテしていったらあげないと、運用する側は回らないと思います。

調整にされてはいけないよということは、歯止めは必要じゃないかなという思いはありますので、意見として言うておきます。

(飯島委員長)

大変大事なところだったんですね。新しい学校をつくったときに、社会との出口で合わないようなハードを使っていたのではしょうがないということだってあると思います。

その辺は、こういう新しい高校をじっくりつくっていく以上は、県教委にはじゅうぶん承知しておいてもらって移管をしていかなければいけないと、そんなふうに思います。

休憩を入れる前に、どうでしょうか。これだけ議論が深まって、この地域で多部制・単位制、どこということとは別問題です。前向きに導入すべきという形で、この休憩の後の会議に入っていきたいと思いますけれどもよろしいでしょうか。

(原 委員)

ちょっと、まだ異議があるんです。

(飯島委員長)

そうですか。それでは、休憩に入りたいと思います。10分休憩いたします。それぞれのお手元の時計で、10分したらお席のほうへお戻りください。

【休憩後再開】

(飯島委員長)

休憩前に引き続きまして、始めたいと思いますけれどもよろしいでしょうか。

それでは多部制・単位制について、この第2通学区でどこの学校かとは別にして、前向きに導入しようという意見に対して、原委員のほうから「まだ」というお話がありますから、どうぞ。

(原 委員)

お願いします。

何と言いますか、論議にはひとつの枠といいますか、範疇とでもいうべきものがあると思います。「多部制をこういうイメージで、こういうことをつけて、お金も潤沢にスタッフも」という、当然の意見なんです。今、出されてきている素案、たたき台がどういうものであるのか。例えば、3部制にすると。

私が先ほど発言したように、ただ単位制のみで運営する学校だということが大原則ですね。それから学校の規模については、これはまだじゅうぶん説明がないような気がしているのですが、県議会での答弁などでは1、1、1という、極めて小規模な今私たちの前に出されているのは、そういう形の多部制なわけです。

それに基づいて、もう少し原則的な議論を私はしたほうがいいということは申し上げたいわけであり。例えばそういう小規模な学校の場合に、もちろんいろいろな生徒がいて、人間関係がわずらわしくて、ほんとに授業だけやって単位を取って、一通りの資格を取っていききたいという、そういう青年が少なからずいるということは私も承知しております。

同時に今日の学校教育が、これも先ほど申し上げましたが、教科学習のほかにさまざま

な多彩な特別活動の中で、自分を鍛え、喜びを得、学んでいくという、これも非常に大勢の生徒が経験していることなわけですね。

いわばそういう特別活動部分が、システマ的には欠落をしているということなんですね。じゃあ長野県的な多部制はどうしたらいいのかという、そういう議論は成り立つと思うんですが、まずそこところはきちんと確認をしていく必要があるのではないかと、それが一点です。

それから規模の問題で、例えば午前 1、午後 1、夜 1 とする。あるいは午前 2、午後 2 ということもあるでしょうけれど、いずれにしても少人数なわけですね。そうすると先ほど西村委員が言ったように、午前中終わってから午後サッカーやればいいのかと言いますが、そんなに単純に少人数で集団スポーツが可能になるとは、直線的にはいきませんね。

そしてまたその特別活動等の欠落、その学習のみが学校運営の中心になっていくわけですから、伝えられたところによると静岡中央のほうでは、途中でやめていく生徒が非常に多いと。少人数であり、かつ大人数の生徒がやめていくという、そういう問題を、引き取ってどう考えるのだろう。

こういうことなどが、あると思うんです。そういう、つまりもう一度繰り返しますが、これを付け加えたりあれを言ったりという、その議論は非常に大事ですが、その前に現在手元にある資料、もしくはこの間検討してきたもの。そういうものを含めて、これがほんとに新しい教育システムとしてどうなんだという議論が必要だということを、私は申し上げたかったですから、もうちょっと待ってくださいと申し上げたわけです。

(飯島委員長)

ありがとうございます。

わかりました。その辺のところはいかがでしょうか。私は先ほど申し上げましたように、後発の有利さというのはあるかと思うんです。多部制・単位制を見てきていただいた。その中で悪い点は、悪くないように運営する工夫ができるんだろうと思います。

事実マイナス要因の話をしてしまいますと、これは私の意見ですが、不登校あるいは、そういうマイナス要因の生徒ばかりを受ける学校ではないようが気が私にはします。前向きの生徒も受け入れる学校にしていくべきだろう、そんなふうに思います。

ただそれは、それぞれの学校を運営していく組織が、いかにそれをやっていただけるか。ですから付帯決議をつけるのか、その辺のところはわかりませんが、先ほど佐藤委員も言いましたが、進学型のも部制・単位制の運営もできるわけですし、それから事実、その不登校の子どもたちは、今の制度でドロップアウトをしてきてしまっているわけです。

その子どもたちを救える学校であるということは、私はひとつの大きなメリットだろうと思います。そしてプラスそこへ、その子どもたちが力を発揮できるような学校につくり替えていくというようなことは、私はできるのではないかとそんなふうには思っております。

ですからこの議論自身を、私たちは今回委任を受けて以降勉強したわずかなものでありますが、県においては平成 14 年 5 月から長野県にふさわしい多部制・単位制高校についてという議論が行われているわけです。そして続いて検討委員会で引き続きやって、私たちにその結果をどうしたらいいかという問いをいただいているわけです。

ですからそれに対して私たちは「設けていくのだ、設けないのだ」という結論を、充分議論して出していただければ、私はありがたいなと思います。運営方法というのは、私たちとすれば、決めた以上は悪くならないように運営してもらわなければ困りますから。ですからその辺のところまで、私たちが付帯決議ぐらいまではいいでしょうけれども、細かく言っていくべきものなのかなというところが、ちょっと私としては疑問で残るわけなのです。

ですから改革である以上は、いいほうに改革してもらわなければ困るわけです。悪いほうの改革だったら改革になりませんから、善い方向への改革をぜひするべく、事務方では努力していただくということだろうと思います。

そんなことで、どうでしょうか。ご意見とすれば。

(荻原委員)

多部制・単位制については、現実の問題として見たところはみんな、言ってみれば不登校体験者と中途退学者と、太田フレックスでも基礎型と発展型とあって、発展型というのは進学対応という部分があったのですが、そちらを選択する生徒は少ないという、そういう現実があるわけです。

だからそこを、総合学科については塩尻志学館という、ものすごくいいモデルがあるわけですから、ただそれについては非常に言いやすいというか、方向も見えているしわかるのですが、多部制・単位制については、その保証がないわけですよ。

改革はいい方向へ行くんだと思うけど、だけどそういう保証がないのをただわれわれが認めていく、言い方は悪いですが「まあ、1校つくりましょう」ということはありますが、実際の保証がつかないところに、諮問が必要なんだというのは、やっぱりセーフティネットとして、私は必要だと思っていますが、進学対応型として実際にできていくのかどうか。そういう高校ができるかどうかという、そういう保証がなければ、単にここで「高校としては、1校いいよ」という格好には、なかなか保証内容を見なければ、私はできない感じはするんですがね。

ただ総合学科については、非常にメリットがあって、志学館のやり方だとか、ほんとのモデルケースがあるわけですから、そういう格好では非常に納得できるのですが、多部制・単位制に関しては、県の資料においても大体太田フレックスや静岡中央とか、そういうところの似たような内容ですよ、言っていることは。たぶんやっていることも、これからやることも、たぶん同じことだと思うんです。

そういう意味では、大変危惧されるもので、もう少し慎重というか、保証の内容をちゃんとつけないと、私は安心して「多部制・単位制はいいですよ」というわけにはできない、というふうに思っております。

(飯島委員長)

そうすると、保証はどこから受けたいわけですか。

(荻原委員)

保証は、県教委がちゃんと「こういう学校をつくれよ」と。だから例えば今回も、入試要項で上田のほうへ1クラス持って行って、佐久へ1クラス少ないとか、そういうよくわからない政策ルートがあるから、その辺はちょっと不信に思うし、二番煎じをやるのであれば、ちゃんと皆さんが言うように集中して、新規のインフラをやって、新規の人材をやってということをしかりしないと、そういう保証がなければ、ただ制度として認めるよということとはできないと思っています。

(飯島委員長)

先発の塩尻志学館は、一つ目でした。どこか県の中で1つつくるなら、どこか先発校がなければいけないわけですね。ですから、その学校を東信でつくる、それは嫌だ。じゃあどこかでやってから、その結果を見てという形なのか、県教委が「大丈夫だよ」と言ってくれば、それが保証になるのか、その辺のところであります。

子どもたちに、生徒たちに、施設をつくらない結論を採るか、前向きなシステムをつくらせてあげるか、ここだろうと思います。

それではどうぞ、もう少しご意見をください。

(遠山委員)

太田市の人口構造はどうなっているのでしょうか。例えば比較的若い人たちが住んでいる市じゃないかと感じたんです。というのは、多部制のフレックス高校ですか。全校で160人でしたか。ちょっと数字を資料として持っているわけではありませんが、あれだけの人数が集まるということは、バックに相当生徒があるということではないでしょうか。

あるいは、太田市以外の地域からも生徒がフレックス高校に集まってきて、あのような学校を形成しているのではないのでしょうか。

そうなると、高校生等、若者が減少している長野県の場合、ああいう学校を維持することは難しくなると思います。

そこで、あのような学校が維持できる背景と長野県の人口構造、外国人を含めた生徒の実態について調べていただくことも必要ではないのでしょうか。

(西村委員)

私も、知っておりませんので、軽はずみなことは発言できませんが、今の遠山委員の話からすると、太田は自動車、電気等々、工場がいっぱいあるんですね。たぶんそちらに勤める人も多いし、ですからおそらく人口構造は若いはずです。

それだけ、人が集められるバックはある。そういう点では、太田というのは、いい立地条件ではないかと思います。

それから、先ほどもおっしゃったように、もう中学から英語で、全ての科目を勉強するとか、群馬県の中では、ほんとに進んだ教育をしています。何をもちて「進んだのか」とするのは難しいのですが、そういった教育をやっている地域です。

だからもし、今回のことを考える上では、立地、それから先ほど何人かの方がおっしゃいましたが、利便性というのをよく考えた上での学校展開を、私はすべきだと思っています。

す。

それから、前半ですっといろいろな話をされたけれど、基本的には若干反対意見もございましたが、ほとんどの方が多部制・単位制については導入していこうじゃないかという話だと思いました。

その中で例えば、長野県モデルの多部制・単位制はどういうものだろうか。そういうことをこれから議論すればいいわけであって、取りあえずは導入するのか、導入しないのか。われわれ第二推進委員会では、そろそろもう決める時期にきているのではないかと思います。

それから荻原委員の話がございましたようにフロンティアとして立ち上がっても、私はいいと思います。それが、改革ではないかなと思います。

（飯島委員長）

ありがとうございます。

どうでしょうか。この第二通学区では前向きに、多部制・単位制を導入の方向で、この後の議論を進めていくということによろしいでしょうか。

はい。別段異論がないようなことで、先に進ませていただきます。一応前向きに、第二通学区では多部制・単位制を導入の方向で検討にはいるということで行きたいと思います。ありがとうございます。

それでは続いて、その先の議論に入っていきたいと思います。多部制・単位制を導入するという話、前向きに検討していく、導入していくということになりますと、対案が出てきておりますことに関して触れていかなければならなくなってくるかと思います。

多部制・単位制を導入しないとすれば、話は別でありますけれど、導入するという形になると、一つ目の望月高校から、「私たちが多部制・単位制に立候補します」という形が出てきております。

これについては、ここで議論するだけがよろしいのか。あるいは当事者に説明を求めるほうがいいのか、その辺、委員の皆さんは、どう考えていらっしゃるか。

（中沢委員）

お願いします。

これは書面で提案されていることで、おおよそのことはわかります。しかし地域の思い、ここで言っている発展を語る校友会の思い等、やはり聞いたほうが私は、よりいいんじゃないかと思います。

それと同時に、県教委のたたき台として出ている野沢南高校と、逆のことでは提案がありますけれども、これもやはり聞いてみる必要があるということを思います。

以上です。

（飯島委員長）

対案として出てきた5つのものの中のうち、望月高校から出たもの、それから細かい名称は略させていただきますが、もうひとつ野沢南高校から出てものに関しては、実質当事者から説明を受けたらどうかという意見でございますが、いかがでしょうか。

(荻原委員)

私は恥ずかしい話ですが、この上田 6 校、佐久 11 校。実際に行ったことのある高校はわずかで、そういう意味では松本筑摩、塩尻志学館へ行ってみて、その現状、校舎を見てもちょっとわかるというような感じはするわけです。

そういったことにつきましては、当事者の皆さんから提案を受ける場合には、その学校へ行ったほうが私はいいいんじゃないかと思います。そういうことで、その校舎を見たり、あと校長先生の話の聞いたり、実際に時間的にどうかという部分もありますが、やはり現実の高校へ行ってみないと、よくわからない部分というのはございます。その辺は、要望としてお願いしたいと思います。

(原 委員)

現在、多部制の議論をしているわけですが、その多部制にかかわって対案の望月の意見を聞く、あるいはたたき台で名前が挙がっている野沢南、今、中沢委員さんからのお話ですけれど、いずれにせよこれから議論は終盤に向かっていくわけですから、せっかくの機会に出されている、この地区からの提案を次回に一気にご説明を聞くと。そういう機会にしたほうがいいんじゃないでしょうか。

(飯島委員長)

一気にということは、どういうことでしょうか。

(原 委員)

だから、ここで出されているものをです。

(飯島委員長)

全部ですか。

(原 委員)

はい。

(飯島委員長)

全部というご意見が出てきておりますが。

(原 委員)

よろしいですか、一言付け加えます。

出されている意見を、「これはよくて、これは悪い」と、最初に分けないほうがいいと思うのです。出されている意見を、それなりに尊重して、委員会としてそのお話を伺い、そして必要な分については質疑をします。こういう取り扱いが一番公平だろうと思います。

(飯島委員長)

その辺のご意見はいかがでしょう。

私は「地域から具体的なご提案を頂き、検討の参考にさせていただく」ということですから、私たちがお願いするところを限定しても、何ら問題はないとは思っております。

皆さん、内容をよくご検討いただいて、私からあえて言うとおかしくなってしまいますが、教職員組合の皆さんから出ているのは、どうも県教委と先生方との間で、もう少し話し合っておいていただければ、私たちこんな苦労しなくてすむなという感じが、非常に委員長としてはするのです。

扱いに非常に困ります。野沢南、それから望月のものは同窓会から出てきておりますから、これは私は真摯に受け止めたいなと思っておりますけど、教職員組合さんのものは、何か私たちはその中の関係の中へ、この委員会が入ってくるのはいかなものかなというのは、私個人としてはあるのですが、委員の皆さんはどうでしょう。

(和泉委員)

今回のプロセスというのは、そういうことを決めていく手順の部分は、すでにもう出ているわけですね。今回はもう総合学科を決めましたから、多部制についてはまだ県は野沢南高ということを行ったけど、われわれの委員会では未決着なので、手を挙げたところの意見は聞く必要性は私はあると思っています。

だけどその間のプロセスの職域や、ものの考え方は手順の中で、この前も県議団の人たちも話をしましたが、それぞれの中のプロセスの中で集約された問題だというふうに理解しないと、これをまた戻すというのは、意見としては目を通しましたが、手順の中では別話ではないのかなと、私はそう思います。

だからまだ高校においての白紙の問題は、要するに決めてないんですから、それに対して対案があるということについては、真摯に討議する値があると思います。だけど、こういうことについての話し合いについては、それぞれの組織権限がやってきた運用の中ですが、委員会が預かったものですから、それなりに参考意見としては理解しますけれど、そこをどういうふうにするかというのは別問題のような気がします。

(飯島委員長)

はい、ありがとうございます。

ほかにどうでしょう。

(太田委員)

判断はわれわれ委員会に付託されているわけですから、まず、われわれがもっと情報収集し、研究検討してから、設置場所等の論議もおこなった上で、どうするかを決めていくべきです。今は、参考意見としてはお聞きしてもいいですが、まずわれわれが理解し、一つの方角性をだしてからでなくては、無責任な判断をしてしまうことになりかねません。

(飯島委員長)

太田委員は、聞く前に私たちがじゅうぶん論議しようということですね。

(原 委員)

よろしいですか。

端的に申し上げますが、私たちの責任、責務というのはじゅうぶん自覚しているんです。そのことと、いろいろな意見を聞くということは、まったく矛盾することではありません。ですから前回の第10回の委員会の経過を見ますと、これについての対案を出されて、これを受け止めたいという意見があったり、公平性がどうかという意見があったり、対案が次々と出されると困るというような意見があったり、いろいろありましたが、この際、対案があったら出していただきましょうと。こういうことで、時間をセットして意見を出していただいたわけでしょう。

そこで、そんなにかたくなになる必要はないじゃないですか。そう思います。

(和泉委員)

かたくなにはなっていないし、意見はオープンにして聞かなければいけない、それはもう認識しています。ただ決めてきた手順の中で、吸収するところの職務権限が働いたり、その機能をやって決めた案についての意見をやる。

ただ要するに学校についての白紙だから、学校についての項についての、そこは「受ける受けない」の話はあるかもしれませんが、先生たちの話はまったく別個の論議で、それは別なところでやらなければいけない。それらも含めて、こういう改革をやろうと意志決定して、組織は動いている話なんで、それをまたここでやるというのは、違うんじゃないかなと思います。

(太田委員)

過日われわれは丸子実業高校を総合学科・単位制に転換することを委員会として是としたわけですが、新聞報道で、委員長談として、「これについては丸子実業関係者も賛同されていることも参考とした」というようなニュアンスで取り上げられていました。委員長に申し上げるのは大変恐縮ですが、委員会としては、丸子実校関係者が賛同しているからでなく、全体最適化という観点から是としているわけであります。

多部制・単位制への転換の件も、関係者のご意見をお聞きする前に、われわれ自身が全体最適化に向けて、どの方法が一番いいのか、もう少し論議し理解しなくては判断できないと思っています。

(和泉委員)

ちょっといいですか。さっきのところで。

もし、これを討議、今後続けていく中で、望月は手を挙げられました。それからこの前の説明からずっと気になっているのですが、なぜ県が多部制・単位制を野沢南高ということを決めたのか、例えば項目、それについて資料をいただいて、そしてそれは当初の計画よりも、今まだ望月の方が、いろいろな方たちが、こういうふうにしたいんだという思いも含めて、そして同じ土俵の中で討議する意味はあると思います。

要するに今、まだ南高が決定しているわけじゃないですが、ここにある学校をレビューして、なぜ野沢南高という名前が挙がったのか、それは選ばれた基準にいろいろな利便性

とか言われていました。

そういうことの項目の対比を比較して、やっぱりこちらがというような委員の討議の合理性はあると思います。だからむしろ、そういう項目についてなぜ第 5、第 6 のこちら側の中で、野沢南だということの、もう 1 回のその考え方、その考え方に対して望月のほうから提案、挙げられたものについて対比すると。

それでやっぱり討議した中で最終的な。それはまだ全体的に決まっていませんから、別段どこということでもないことを含めて、討議したほうがいいんじゃないかなと思います。だから学校について、どこがいいかということについては、討議の余地はじゅうぶんあると思います。

（飯島委員長）

はい、わかりました。

今日、ひょっとすると、この傍聴席に望月の方、野沢南の方がいらっしゃるかと思いますが、その準備がないのにここで説明というのも大変失礼な話でありますから、お願いするなら次回という形になろうかと思います。

私はせっかくと言いますか、真摯に対案を出した意欲を受け止めまして、望月と野沢南の皆さんには 1 回説明をしていただくかと思っております。ほかの、あと 3 案につきましては、2 つは教職員組合ですから、ここで私たちがこれに対していろいろ言える立場ではないというふうに、私は認識しております。

もし意見をということであれば、直接事務局のほうへその旨を言っていただいて、そちらで解決してほしい問題だと。私は思っております。と言いますのは、私たちに所掌事項で依頼されたことでありますから、それに対して私たちはどうだという判断をすればいいことでありまして、こうなったことについて、それを受け入れていろいろ議論をしていく必要はないというふうに私は感じておりますが、その方向で行きたいと思いたすけれど、よろしいでしょうか。

（原 委員）

わかりませんね。

なぜ、教職員組合の提案は受けないんですか。今、そういうふうにおっしゃられましたよね。なぜですか。

（飯島委員長）

それは、私たちのところへ来る前に、当然事務局と高校職員の間で話し合いというか、でき上がって私たちに依頼されているものだと思うんですよ。

（原 委員）

よろしいですか。

学校の再編、高校の再編整備とか、新しい高校を導入とか、これについてはさまざまな意見があるわけですよ。さしずめ賛否両論ということになるでしょうが、この委員会が発足して、間もなく半年になるわけですよ。

さまざまところで、いろいろな検討を加えてきているわけですから、それが教職員組合だから、この際除外するというのは筋が通らない。あるものはここで提案説明を受けて、あるものはしないという、その取り扱いはどうしても納得いかないですね。

（飯島委員長）

もうひとつ言わせてもらいますと、内容的に私たちは今まで 10 回推進委員会をやってきた中で、議論してきて私たちが今ここへ到達してきた内容であるかということです。内容が。1 回から 10 回まで議論してきた内容に対して意見を言っているだけでありますから、意見とすると同じことを繰り返すだけなんですね。そのように思うんです。

委員の皆さん、いかがでしょうか。私が決めることはありませんから、私は交通整理でありますからどうでしょうか。

（遠山委員）

今のは確かにおっしゃるとおりだね。教職員組合の皆さんの立場で主張されていると思いますから。だけどこの前 30 人学級の問題だとか具体的に見ると、地域の皆さんにしっかり話せとか、こういうような問題はどうですかね。確かに今の多部制の問題あるいは総合学科の問題に、30 人学級の問題はこれは関係ありませんよ。

だけどこれは私どもに、なかなか検討しろと言ったって、非常に難しい問題もあると思うんですね。30 人学級にしてもらえればなおありがたいけどね。20 人でも 10 人でもいい。そういうことを考えると、ここではこの問題、具体的に出ていますが、議論してもすぐにはできないのではないかな、という感じはしています。

（原 委員）

今のご意見ですが、30 人のことというわけではありませんで、これは提案しているのは、丸実の総合学科転換の問題、望月の多部制への転換の問題、それから上小地区、佐久地区における高校の総数の問題ということで、いずれも議論に、今までの議論、そしてこれらの議論にかかわることですね。別に 30 人を即やれなんてことは書いていないですよ。

（佐藤副委員長）

私は本日初めて地域からの提案の 1 番から 5 番を見たわけですよ。こういう中でやはりこういう提案を、議題として上げていく場合、これをどういう形で取り扱っていくかということは、議案の提案権は委員長にあるわけですから、やはりこれを 1 回見て、場合によっては私が職務代理になっておりますので、委員長と内容を見まして、それで「これとこれは、この委員会として皆さんに諮っていかねばいけないな」というような形で、次回提案をさせていただくということでいかがでしょうか。

これは委員長が、これを取り上げるか、取り上げないかというのは権限があるわけですから。これは委員長一人じゃ荷が重いと思いますので、中身は私と二人でしっかり読み、精査しまして、それでこれとこれは提案として取り上げると。それで取り下げた理由に関しては、もちろんご説明をして了解していただくという形で進めたいと思いますがいかがですか。

(各委員)  
異議なし。

(飯島委員長)  
よろしいでしょうか。  
ありがとうございます。

それではそのような形で、どうしましょう。次回説明、それぞれ来ていただくことになると、早めに結論を出して、そして来ていただくこととなりますが、皆さんにご了解する前に、その結論までお任せいただけますか。その結果までご了解いただくということで、よろしいでしょうか。

(西村委員)  
今の、佐藤委員のご意見に私も賛成です。われわれ委員長名で委員会として、「第二推進委員会東信地区では、地域からの高校提案を募集します」ということで、パブリシティを流しました。これはよく考えていただいて、今後の結論を出してください。お願いします。

(飯島委員長)  
わかりました。

(小林委員)  
それから、時間や質疑をするのかどうか。説明だけ伺うのか。その事も決めておいて、連絡していただきたいと思います。

(飯島委員長)  
はい、わかりました。  
それでは募集要項の内容を、じゅうぶん精査しまして、提案していただいた皆さんに失礼のないような形で対応させていただきます。そんなことで、ご了解をいただきたいと思います。

(原 委員)  
もうひとつ。30秒です。  
要は、この委員会の公開、いろいろな意味での開かれた論議ということにかかわってく  
ると思いますから、よろしくお願ひしたいと思ひますし、第一通学区推進委員会では教職  
員組合も提案も説明されていますので、そのことも参考に。

(飯島委員長)  
はい、わかりました。  
それでは、少々早いのですが、この後私たちは、今委員長と副委員長に任された件につ  
きまして、この後話を詰めていきたいと思ひますから、委員会は20分ばかり早いですが終  
わりにしまして、次回にしたいと思ひます。

ご了解をいただきたいと思います。それでは事務局、お願いします。

（植松主任教育支援主事）

次回の日程でございますが、11月27日日曜日の午後に候補としてございますので、ぜひご都合方、お願いしたいと思っております。場所につきましては、また決まり次第ご連絡をさせていただきたいと思います。

（飯島委員長）

それでは27日、本日の翌々週の日曜日の午後に委員会を開くということで、また詳細につきましては事務局のほうからご連絡を申し上げます。

どうも、ありがとうございました。